



TITLE:

<羽田博士追悼録> 羽田博士を悼む

AUTHOR(S):

宮崎, 市定

---

CITATION:

宮崎, 市定. <羽田博士追悼録> 羽田博士を悼む. 東洋史研究 1955, 14(3): 1-4

ISSUE DATE:

1955-11-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/139044>

RIGHT:

## 羽田博士を悼む

本會々長、日本學士院會員、京都大學名譽教授、羽田亨博士は昭和三十年三月初から宿痼再發のため京都大學附屬病院に入院療養されていたが、藥石効なく四月十三日午前七時二十一分、遂に永眠された。前日から危篤が傳えられたが博士の強靱な氣力は、長い闘病の後の肉體的衰弱にも拘らず、注射によって數回の危機を脱したので、或いは再起の僥倖も希望されたが奇蹟は遂に起らなかった。靈柩を大宮田尻町本邸に安置した後に喪を發せられた。先生の逝去はひとり本會にとって打撃であるばかりでなく、廣く學界に對して一大損失であり、哀悼と共に痛惜の念轉た切なるものがある。

先生は幼より神童の譽れ高く、京都府立第一中學校を経て第三高等學校に入り、屢々校友會誌に、その才筆を揮われた。轉じて東京大學史學科に於て、主として白鳥庫吉博士について東洋史、就中元代史を專攻された。卒業後、京都大學大學院に入り、二年の後講師を囑託せられ、明治末年、内藤湖南博士に従つて奉天に至り宮殿所藏の五體清文鑑、滿文老檔等を撮影して歸られた。間もなく助教授に進み、露國に出張を命ぜられ、彼地の碩學ラドロフ教授の門を叩いて歸り、再び二年間の歐米留學を命ぜられ、佛國に於て同年輩のペリオ教授と肝膽相照し、未整理の敦煌文書を供覽する便宜をも與えられた。歸國の後、續々研究業績を發表して學界の驚異の的となり、従前の西域史研究は此に面目を一新するに至った。大正十三年教授に任ぜられ、暫時言語學講座を擔任されたこともある。當時東洋史には内藤、桑原、矢野、羽田の四教授あり、中國文學、哲學には狩野、鈴木、高瀬三教授、小島助教授あつて京都支那學の全盛時代とも云うべきであつた。昭和二年、當時の學生が支那學會の高蹈的なるに懣らずして新たに東洋史談話會を設け、更に昭和八年、今度は卒業生を中心として我が東洋史研究會を創め、二年後より本誌「東洋史研究」を刊行することになったが、毎に率先してこれが奨勵育成に當られたのは先生であつた。東洋史談話會はその性質上、現職教授を會長に推すが、東洋史研究會は先生退職後

も引續き會長として留まれ、先生の逝去に至るまでその指導扶翼を受くること二十餘年に及んでいる。本邦のみならず、中國を除いては世界に唯一の東洋史學の専門誌として發足し、卷を重ねること十四、學界に搖ぎなき名聲を確立した本誌の發展は一に先生の庇護の賜である。

先生は教授在任中も或いは附屬圖書館長を兼ね、或いは文學部長として行政的手腕を示され、ついで昭和十三年、時の總長濱田耕作博士急逝の後を受け、評議員會より京都大學第十一代の總長に推された。時恰も滿洲事變に引續く日華事變の最中であり、形勢はやがて第二次世界大戰、太平洋戰爭の勃發に進展し、國步艱難を極め、この間における先生の心勞は一通りでなかった。特に一部右翼よりする所謂京都學派に對する攻撃には最も心を痛められ、最少限度の學問の自由を確保するために精根を盡して立向われた。然るに敗戰によって事情は一變した。先生は敗戰による混亂が一應納まったのを見届け、第二期總長の任期一年を剩して自ら勇退された。時に昭和二十年十一月であり、間もなく貴族院議員に勅選され、京都大學名譽教授を授けられた。

先生は總長在任中より東方文化研究所長を委嘱されていたが、戰後これを京都大學人文科學研究所に合併する構想が生れ、昭和二十三年三月、いよいよその實現を見たので、所長を辭任して現職教授に後事を委ねられた。東洋史研究室と人文科學研究所東方部とは先生の教導を受けること最も深く、相共に我が東洋史研究會の最も有力な地盤をなすものである。本會員が中心となり、先生總長在任中にその勞を慰めんがため、昭和十七年先生華甲の歳を機として、還曆記念事業會を組織し「羽田博士還曆記念東洋史論叢」を編纂して呈上すべく謀ったが、組版を終えて印刷に掛る直前に敗戰となり、その發行は延引を重ねて昭和二十五年に至った。幸いにして梅原末治博士、エリセエフ教授、ファース氏の盡力によりロツクフェラー財團の資金援助を受け、同年八月、「還曆記念」を「頌壽記念」と改めて刊行し、之を學界に送ることが出來た。恰も先生は京大附屬病院に療養中であつたが、この書を手にして涙を流して喜ばれた。この書は戰爭中時局の重壓下にあるながら、我が國東洋史學の水準を些かも落さなかつたものとして内外の賞讃を蒙り、更にこの書の出版が若干の機縁と

もなり、先生が昭和二十七年フランス學士院よりジュリアン賞を贈られることとなったと聞くのは、本會として快心に堪えない。なお現今文學部に所藏する先生油繪肖像は、前記還曆記念會が先生竹馬の友たる太田喜二郎畫伯に委嘱し、同畫伯より犠牲的に製作寄與せられたる二面の中の一面である。先生が總長を退任された際には一切の行事を辭退されたので、總長としての肖像畫は歷代の中、先生の分だけが缺けている。

先生は總長在任中多忙の間にも學を廢せず、終戦後閑地につかされると、年來の素志たる「中央亞細亞の文化」の改訂に著手され、昭和二十三年、これを「西域文化史」として出版された。前著「西域文明史概論」と共に學界不朽の名著であり、その業績は内外の著目する所となり、前記ジュリアン賞の外に昭和二十八年文化勳章、昭和三十年佛國政府レジオン・ドノール勳章を贈られたのは世人のよく知る所である。

先生の訃報の達するや、政府は先生従前の功績により、位を従二位に進め、天皇陛下より木盃一組、並に金一封を下賜された。四月十四日自宅において、しめやかに密葬が行われたが會葬者は五百を越えた。法號を文清院殿滴翠元亨大居士という。新村出博士の擬するところで、清元の二字は蓋し先生の研究と最も緣故の深い元・清二朝、就中「五體清文鑑」を連想せしめるもの、滴翠は先生の雅號である。

本葬は續いて十七日午後、菩提寺なる興聖寺において山崎相國寺管長を導師として執行された。折柄の大雨にも拘わらず、參會する者引きもきらず、堂内にては瀧川京大總長、高山京都市長、高田文學部長、貝塚人文科學研究所長、神田京都博物館長、門下生總代鷺淵一博士、本會代表安部健夫教授等より弔辭が捧げられ、外に文部大臣、フランス大使などからも弔辭が寄せられた。

更に一月後の祥月なる五月十三日、京都市は先に先生を名譽市民に推薦したるの故を以て、名譽市民葬の禮を以てする告別式を岡崎公會堂において盛大に執り行つた。

本會は五月二十二日、先生を會長とする東方學會と共催の下に人文科學研究所において、先生の遺品、著述を展觀し、

會員安部健夫、田村實造、宮崎市定三氏による追悼講演會を催して先生の學業の一端を窺い、講演後談話會に移り、追憶談に花を咲かせて、先生の遺徳を偲んだ。なお同日は時を同じくして東京東洋文庫において東方學會東京支部主催の追悼會があり、石田幹之助氏、原田淑人氏の講演があつた。同日兩所における講演内容は雜誌「東方學」第十一輯に掲載される筈である。

本誌は本號を以て、羽田博士追悼記念號とし、收載豫定の論文の外に約八十頁を増加し、詳細なる先生の年譜、著述目錄、及び親近諸氏の手になる追憶記事を掲載して、之を先生の靈前に供え、且つは之を永久に傳えんと計った。在天の靈、もし照察あらば、恐らくは莞爾として享け給うことであらう。

(宮崎市定謹記)